

ゼミ生から

せき しょうへい
関 翔平

東京大学文科 III 類 2 年

「全共闘」班，始動。あれはきっと，2008 年の 5 月頃のことだった。

僕は東大の駒場キャンパスを歩いていて，道端に色々面白いものがあることに気づいていた。101 号館前には「一高」の字が記されたマンホールがあり，正門を入れて左手にいくと，「一高ここにありき」の碑が建っている。農業学校時代の記念碑も建っていれば，真新しい食堂や図書館の新築建造物群の奥には，かつてそこにあった駒場寮のアーチが残されていた。学生たちによるサークル活動や文化活動の拠点となっている学生会館には，無数の落書きが残されていた。大昔に書かれたであろう政治的なアジテーションや，退屈な毎日を恨めしげにマジックペンで書き綴るへたくそな文章。落書きは，しかし「学生」をずっとそこに残していた。

僕は教室に閉じこもっているより，ぶらぶらするのが好きだ。ぶらぶらしていると，色々なものが目に飛び込んでくる。東京大学はひとつの歴史であり，学生たちの歴史でもあるのだと感じられた。

あるとき，大学の書籍部で全共闘に関する写真集を手にしたことがあった。ぼくが毎日のんびりと歩いている駒場や本郷は，1968 年を写したそれらの写真の中では，ゲバ棒とヘルメットに埋め尽くされ，机は引っくり返され，殺気立った学生たちが対峙する戦場だった。今の学生がテニスラケット片手に闊歩している銀杏並木を，彼らはゲバ棒片手に走り回り，僕らが新築された食堂の中で定食を食べる代わりに，彼らはバリケード封鎖された教室の中でおにぎりをほおぼっていた。同じ空間に存在した，あまりにも異なる時間の流れ。僕はそのとき強烈に「知りたい」と思った。

義務ではなく。そして現在を，過去を，否定するのではなく。身の上に流れた時間は違えど，同じ空間を，あるいは同じ「学生」という期間を過ごした僕ら，そして彼らの間には，あまりにも異質な，しかしあまりにも興味深い対話が生まれるのではないか。そう思った。そんな時，僕ら「全共闘」班は，集まった。現在を，過去を，否定するのではなく。散歩するように，しかし当時を生きていない僕らはあるいは「門外漢」と罵られるかもしれない。だけれど，彼らはあの時学生であって，そして我々とともに「今」という時間をなお共有している。それだけで十分だし，それが一番大切だった。取材では，本当に色々な人達にお話を伺った。全共闘の一員として闘った人，運動の激化に反対して真っ向

から立ち向かった人、あるいは運動から降りた人、警察の側から運動に対処した人、腹の中にもやのようなものを抱えながらしかし、傍観していた人。そこに僕らが見出そうとしたものは政治的なメッセージや各党派の主張ではなかった。あの頃学生だった、そして真剣だった「個」としての彼らが、何を思い、そして今何を思っているのかということだった。学生として何を思い、そして今の学生について何を思うのか。彼らがお互いにぶつけ合った激論、主張。論争のその先にある可能性としての対話が、何を今に残したのか。そして今なお、残しうるのか。1960年代末の学生運動は終息したが、まだ1960年代末を生き残った人々の「個」は続く。あの頃の学生運動は負の遺産も多く残したかもしれない。だけれど同時に、もし未だに語られていない「正」の遺産があるのなら、はた迷惑かもしれないがそれを探り出し、未来に投影したい。しばらくの間僕らと彼らが未来を共有するのなら、その間に。そして僕が今こうして学生である、この瞬間に。取材は進んでいった。

一緒にゼミで活動してきた近藤、山本の二人とは何度もぶつかった。激論して、これでもう解散か、と思うことも多々あった。だが、こうして11月23日の企画の準備も佳境に入っている今、僕たちは論争の先にある対話を少しながら見出した気がしている。誰がトップでもなく、しかし誰もが個人として。企画をやってきたことの一番の収穫は、もしかしたらこのことだったのかもしれない。

取材を快諾してくださった干場革治氏、高橋公氏、三浦聡雄氏、若松孝二氏、佐々淳行氏、柴田洋一氏、鈴木邦男氏、そして当日講演者としてパネルディスカッションに参加してくださる最首悟氏、米田隆介氏、様々な場面でアドバイスを下さった前田和男氏、お忙しい打ち合わせの中お邪魔させて頂き、これまで知らなかった全共闘の側面をお教えくださった日大全共闘の諸氏にまず心からの感謝を申し上げたい。そして立花先生、事務所の菊入さん、緑さんにもここまで企画を進める手助けを様々な場面でして頂いたことに心から感謝している。ゼミ生のみんな、学期終わりまで残り少ない時間だけど、これからはがんばりましょう。それでは拙文失礼。

やまもと りょう
山本 遼

東京大学理科I類1年

ゼミの時間に東大の駒場寮についての話が出たことがきっかけで、かつて東大を覆った“熱い”時代のことを知りたくなった。それだけの、素朴な動機。知識など、何も持ち合わせていない。

運動の引き金となったのは、大学運営者たちの権威主義的な振る舞い、あるいはその中でなされる「教育」に対する激しい憤りだったことを知る。調べれば調べるほど、数多の声が堰を切ったかのように出てくる。臆することなく、「団結」「闘争」「粉碎」「革命」「勝利」…いま学生の身分にある自分を包む、この気息い日常とはおよそ縁遠い言葉を高らかに叫ぶ彼らは、いったい何者なのか。原動力は何なのか。

今や、当時の面影の多くは消え去っている。いや、消し去られているという方がより正確だろうか。それでも、あの時代を直に体験した方々や、運動の様子を記録した資料・写真などに接すると、状況がどちらに転ぶとも分からない緊張を感じることができた。“Care”という視点において、人の考えを汲むすべも知った。だが彼らにとって、運動は「論理」を推進する過程でもあった。言葉を駆使し、己の主張を貫徹する。たとえ警察側の目論みが多少働いていたとしても、結果として彼らは互いを唾みあい、傷つけあった。あまり積極的でないながらも、僕はそうした状況に、温もりとは異質な「人間らしさ」を見いだしている。戦争のような（少なくとも日本人にとって）極端な例を持ち出すまでもなく、日常的に「論理」「理性」の無力さを感じることは多々ある。

あの運動が、雰囲気や掴むだけでは足りない要素を併せ持っているということを忘れてはならないと思う。そして僕は、囚らずもこのことに苦しめられている。いつまで経っても、対象に深くまで潜っていくことができない。伝え、受け止め、共感し、反論し…「世の中に眼を向け、何かを変えようとする意味も、『自分』の文脈でしか語り得ないのだろう」などと、ある種の虚無的な感覚からいつまでも抜け出せずにいるのだった。

気が付くと、言葉をほとんど持たずにここまで来てしまっている。近藤さんや関さんが強い目的意識を持って行動しているのとは対照的だ。二人が始終“熱さ”を放ちながら論を交わしていた姿は、非常に印象深かった。語り、そして語らせる能力を持たない者は、社会というコミュニケーションの網^{ウェブ}の中で、他者の足手纏いとなり、いつしか置き去りにされる。めまぐるしい現代を、どう生きるか…依然、何らかの光明がああ運動の中に見いだせるような気がして已まない。あるいは、既に知っているものの表現できていない、というだけなのだろうか。

悔しさとは違うけれども、どこかもどかしい。とりあえず「そんなものだ」と割り切っておくことにしたい。

おわりに——この企画に携わる中で非常に多くの刺激を与えてくれた関さんと近藤さんの二人、そして企画の運営に協力して下さったすべての方に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

こんどう のぶろう
近藤 伸郎

東京大学文科I類1年

まず、最初に僕はゼミ長の関さんにもものすごく感謝しているということをおきいた。時間割をこれでもかというほどギュウギュウに詰めていた僕が無理をして立花ゼミに来た動機の一つは、もちろん立花隆師自体にもあったが、それと同じくらい大きかったのは、学生運動にある。立花ゼミに参加していた友人（別の企画に参加）から「全共闘の企画もやっていたよ」と聞いて、それならば行ってみようかと思ったのである。僕はもともと学生運動を勉強したいというモチベーションがあつて、そのために企画を利用した、とも言えるのである。この全共闘企画がなければ、これほど各界の人に取材に行き、「学生運動とは何だったのか」というテーマにコミットすることはなかったに違いない。今の僕がいるのも、関さんのおかげなのである。

僕が学生運動に興味をもった理由は明確に大学受験期にある。現役受験生の時は東進ハイスクールの須藤公博先生、浪人生の時は駿台予備校の表三郎先生、その友人でもある河合塾の牧野剛先生から学生運動経験者のエトスを感じ取ったのである。僕は小さな頃から周りの環境に漠然とした疑問を抱くことはあったが、これほどまでに社会的にタブーとされた問題に堂々と斬り込む先生方はどこにも見なかったのである。純粹にすごいと思った。しかも、とてつもないエネルギーだった。感動したのだ。社会の中の何か隠された宝物を発見した気がしたのだ。

その宝物は僕の長い受験時代に増幅された。僕は駿台予備校で一年やっても、東大に受からなかったから、慶應義塾大学に行き、再受験（つまり僕の大嫌いな表現を使えば「仮面浪人」である）をすることになるのだ。受験生を3年していたことになる。慶應時代、受験勉強をした記憶はないが、「東大生バカヤロー」と言って本を読んで、論文を書いていた記憶はある。これが「周辺」の「中心」へ向かうベクトルのエネルギーなのだ。そのエネルギーの中で、僕の「世界へのアンチテーゼ」は増幅したのだと思う。そして、僕は今、その大嫌いな東大にいる。自己矛盾である。けれども、僕はこのことに関して自己批判をするつもりはない。今の僕は誠実に生きてきた結果であるから。自分が精一杯歩んできた道ではないか。それに誇りをもたずして何に誇りを持つのだろう。むしろ、僕は自己肯定してもいいのではないかと考えている。歪んだ体験が原動力となり、新たな世界を生み出したのだから。ズレたエネルギーは様々な原動力になりうる。世界に対してアンチテーゼを掲げ、世界を変えたのは、いつの時代も周りとはズレた変態たちであった。今の時代も必要とされているのは変態たちなのではないか。

学生運動経験者のメンタリティーには、何か普遍的な形而上学が潜んでいると思っている。もちろん、運動の話は一筋縄にいかない問題ではある。簡単には語れやしないし、語れば語るほど遠ざかってゆくような側面もある。けれども、沈黙すれば良いという問題ではないと思うのだ。たしかに、暗い過去である。特に逮捕された（パくられた）者はそうであろう。その質感は体験者にしか分からないだろう。けれども、ある種の普遍性を考えること、語ること、伝える努力は必要だと思うのである。自己肯定して欲しい。それは、

人間が根源的に類的存在であるから。

語ることを「accountability = 対応能力 = 責任」として相手に押し付けることはしたくない。「総括要求」はしたくないのである。ここから先は倫理の問題であり、強制力は伴わないだろう。各人の哲学の問題である。だけれども、人間とは誤謬的なのだ。間違いだってある。弱さを認める勇気があっても良いだろうと思う。この考えは、取材を進めて行き、様々な人に話を聞いて育まれたものである。彼らの体験は、若者にとってのアクチュアリティとなるはずだ、と思っている。

現代がどこか生きづらい時代だと言われる原因と、60年代のあの頃の空気の諸原因というのは、どこかで根っこが繋がっているのではないか。このように考えるとき、学生運動が“ほぼ”皆無となった日本において、当時の彼らの体験は、「今をどう生きるか」という問題を考える際に大きな示唆を与えると思うのである。彼らが「革命」のために生きたと仮にすれば、会場に来たあなたは何のために生きるのだろうか。人間なんてそう変わりはない。答えの根っこはどこか一つにまとまっているはずだ。

このような問題意識で、僕は立花ゼミの全共闘企画を進めている。やはりズレている僕としては、全共闘班との「ズレ」も気になっている。けれども、思うのである。良くやっているよなあ、と。5人の全共闘班（中心で動いているのはたったの3人！）でよくここまで企画がやれたよなあ、と。皆、連日徹夜で仕事をやった。まるで当時の人たちのようである。それに、僕がもう一つとても感動したのは、ゼミ長の関さんが、全共闘班のトップになりたくないと言ったことである。全共闘班としては、あくまで全共闘“的”に、組織のヒエラルキーを認めずやっていきたい、と。だから、彼は山本義隆のポジションだよ。僕のような変態がいるなかで、果たして組織としてのまとまりが出るのだろうか。それがずっと疑問だった。何度も内ゲバが起ころうになった。こうして今、原稿を書いている時でさえ、そうである。けれども、何はともあれ、こうして一つの企画ができたではないか。そのことを「自己肯定」（組織は＜自己＞である）しておきたい。

最後に、人が何のために生きているかということに関する今の時点での僕なりの答えを示しておきたい。それは、人間がコミットする二つの大きな対象……ズバリ「恋と革命」である。なぜかこの言葉が頭に残っている。それは、エロスとタナトスとも言えるかもしれない。生と死は渾然一体。僕らは死ぬようにして生き、生きるようにして死ぬ。そういった時、最後まで残るものは何だろうか。命を持っていること？ そのスピリチュアリティ？ 人と人が繋がっているということ？ 企画発起人の関さんだけではなく、一言も文句を言わずに僕らを支えてくれた山本君（彼の協力がなければ、冊子もホームページもできあがらなかった）、講演を快諾して下さった立花先生、センシティブな部分があるにも関わらず今回の企画に参加してくれた学生運動経験者の方々、もしくは現役で学生運動をしているの方々、我々のインタビューに快諾して下さったの方々、企画の垣根にとらわれず協力してくれたゼミ生の皆、見に来てくれた皆、そうした「人とのつながり」があって、初めて今回の企画は成り立った。心から感謝したい。

